

平成24年度新しい公共の場づくりのためのモデル事業

いわて文化支援ネットワーク通信

アシスト・なう

創刊号

発行日
平成24年8月1日

発行: 特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター / 印刷: 社陵高速印刷株式会社

いわて文化支援ネットワーク 熟議 vol.1

テーマ: 「震災後の被災地の芸術鑑賞事業について」

とき: 平成24年7月15日(日)
会場: いわてアートサポートセンター風のスタジオ

東日本大震災から2度目の夏を迎え、沿岸被災地の現状はどう変わったのでしょうか。いわて文化支援ネットワークでは、沿岸被災地と盛岡から7名のゲストをお招きし、「震災後の被災地の芸術鑑賞について」議論しました。

被災地の芸術鑑賞は、今…

岡本 ヴァイオリン教室の仲間の中には、うちを流され楽器も流された人もおられますが、楽器支援をしていただいたので今も一緒に楽しく合奏しています。今年に入ってから、有名な演奏家の方でも無料で鑑賞させていただく機会が何度もあり、大変嬉しく思っています。支援にあたり、演奏してくださいな方、見えないところでご苦労しながらも被災地にいろいろな鑑賞会を届けて下さった多くの方々ともっと寄り添ったかたちで鑑賞できたらいいなと思います。

小川 私たちは、昨年11月に地元住民9割で立ち上がった法人です。地元雇用の者の斡旋などさまざまな事業をしていますが、今回はテーマが芸術鑑賞ということで、大槌の子どもたち20人くらいを集めて「プチャッとミュージカル」というのをさせていただいています。

震災当時、笑っているんだけど、実は心から笑えていない子どもたちが結構いて、劇を通じていろんなところに行っている交流をして元気になってくれればということが始めました。8月は東京公演を控えています。

川畑 釜石市芸術文化協会と釜石市民劇場の活動拠点だった釜石市文化会館は、津波で二階まで水をかぶって使えなくなっていました。

芸術文化協会約60団体は、昨年何もないところから大変な思いをして市民芸術文化祭をやりました。市民劇場は、去年はできなかったが今年はシープラザの大きなテント小屋を借りられないか現在交渉中です。

中村 リアスホールは、岩手県沿岸被災地の中で残った数少ないホールの一つということもあり、いろんな支援コンサート、貸し館が集中している状況です。支援して下さる皆さんには申

発刊によせて

特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター

理事長 瀬川 君雄

震災支援というと、足らざるを補うことと誰もが考えます。しかし、本震災で失ったものはあまりにも大きく、大きすぎるがゆえに、決して元通りにはならないという現実も見えます。だからこそ、誰もが「新しい時代を築いていかなければならない」と考えました。同時に、震災直後に襲われた深い絶望感からの回復をはかるためには、私たちの魂を揺さぶり鼓舞する何かが必要でもありました。

そしてそれは、民俗芸能や祭りのような暮らしに根ざした文化であり、人間の五感に響く、さまざまな表現活動、芸術や文化の力であったのです。

文化支援には二つの道が見えます。ひとつは、地域の芸能や文化活動の再生、ひとつは芸術文化の力によって地域の復興をアシストすることです。震災前、文化活動へのサポートは、行政や企業のメセナの役割と考えられてきました。行政や企業の力は勿論大切ですが、それに寄りかかりすぎて、私たちは自分たちから動き出すことに躊躇していたらいいがありません。

震災後、演劇・音楽・美術等の分野で活躍する仲間たちが集まりました。文化の力を信じ、新しいネットワークをつくり、文化支援活動を興そうと集ったのです。そこから、行政や企業との協働は勿論、多くの市民の協力も得て、「いわてフィルハーモニー」の結成や「3・11絵本プロジェクト」への参加をはじめ、「楽器アシストプラン」などの新しい文化活動や支援活動が生まれました。「いわて文化支援ネットワーク」の誕生です。これこそが「新しい公共」とも呼べる活動であると信じ、さらにこの「通信」がネットワークの輪を広げる役割を果たしていくことを願い、発刊の言葉とさせていただきます。



岡本 千代子さん(宮古市) 音楽鑑賞のほか自身もバイオリン演奏を楽しむ。震災後もレッスンで心が癒される。音楽をやっていると仲間と話す



小川 淳也さん(大槌町) 一般社団法人おらが大槌夢広場発起メンバー。仲間と共に地元発信のさまざまな事業に取り組んでいる



川畑 安彦さん(釜石市) 劇団「青い海」主宰。先人に学ぶ、をテーマに毎年開催される釜石市劇場公演にも参加



中村 仁彦さん(大船渡市) リアスホール職員。避難所設置からボランティア受け入れ事業対応まで。震災後、全国で一番忙しかった施設職員(?)

し訳ないんですが、その上で無料コンサートの問題点を3つほどお話しします。

まず、地元経済が動きづらい。もう一つはコンサートの場合、無料じゃなきゃ人が集まらない状況があり、市民会館の自主事業に関しては最低限500円、協力・共催でもできるだけ有料でお願いしています。

無料の弊害でもう一つあるのは、最近、地元の現状とニーズを十分に把握しないで乗り込んでくる団体さんがチラホラ見えてきました。成功すれば大変いい企画なんですけど、コケた時のリスクが地元にあることも考えて欲しいと思います。

盛岡からの文化支援

伊勢 被災地の現状は、沿岸にお住まいの方々が話された通りだと思っんですが、当時は東京方面の方々の感覚と盛岡の私たちの感覚。私たち自身の感覚も沿岸に行けば全然違うなと思っました。情報が遮断されていましたし、特に芸術関係は好みが広いのでなかなか

か量として上がってこない。それで何かがハズレなことをしちゃう...というのが、私にもありました。

寺崎 震災直後は文化どころではない。芸術は二の次、生きることが先です。暫くたって、皆さんがいるような支援をする中で何が必要なのか、非常に混沌とした状況の中で情報が交錯していました。そんな折、平田オリザさんと懇談する機会があり、「ある一定時期を過ぎた物資支援は、地元経済の痛手になる」と伺いました。

また鑑賞事業の予算が全部、復興支援に回され、地元の演奏家は二次被害に遭っていました。私たちがいわてフィルムもそれを機に結成されたわけですが、外から来た人たちとミックスしたりコラボしたり、何度も足を運んで調整する。コーディネートはすごく苦労する部分ですが、地元のことを考えるとそういったことが必要と考えます。

水野 私共、舞台制作会社は震災後、翌2カ月分の仕事が全てキャンセルされた状況で、すごい危機感を持ちながら

らも、地元各地域避難所のニーズ把握に動きだしました。

その中でまだ停電中という所があった、「何でもいから音が聴きたい」という声に、まだ盛岡では芸術をすること自体が反対される状況の中で、実際に元の方々は待っているんだと思っ、ボランティアのコーディネートを始めました。

私共も、平田オリザさんの「芸術家がいままでボランティアをしていてはいけない」という話を聞いていたので、半年後には、お金をもらおう仕事に切り替えました。

文化の無料事業について

岡本 今年で47回を迎えるヴァイオリンの発表会がありますが、昨年は市民文化会館が使えないということもあり、危ぶまれたのですが、たくさんの方々からご支援を頂き会場となった建設会社のホールにはピアノをヴァイオリンを流された子供にも楽器支援をして頂き、無料の発表会を開催することができました。

そして今回は入場料を頂いての発表会。少しづつ有料化に向けて動いてきたかなと思います。

川畑 私の劇団は去年、ステーションホテル5階で、1000円の入場料で公演をしました。演劇でも音楽でも、どれだけ被災しても、生活が困っていても、他に調達してもいいからお金を払って、いい芸術の値打ちに触れるというのが私の願いです。

釜石芸術文化協会も、例年だと私たち団体がお金を払っていたのが、去年は義援金があったので、60数団体、全部無料でやっています。

小川 芸術鑑賞だけではなく、多分いろんなボランティアの炊き出しとか物資の配布など、当初はそれがなければ被災地では過せないと状況だったんですが、無料慣れについては私の周りでもありましたね。大槌はコンビニやショッピングセンターが動いているんですけど、買い物袋を下げている人が少ないように感じます。まだ支援物資がもらえるんじゃないかと。

伊勢 盛岡に避難してる被災者は6月1日段階で1573人。その中の16%が生活保護の生活水準以下の収入じゃない。今のみなし仮設への家賃の補助が来年度いっぱい打切り。それが終わると半分以上の人がそういう状況になるのが予測されます。何故なら、職が決まっていないんですからね。

な芸術活動への思いが強い。そうした中で、次の新しく作る表現の場はどういうものがいんだらうとか、復元ではなく、何か違う方法が出てくるのじゃないかと。

今求められる表現とは?

伊勢 被災地支援として持つていくかどうかということ、表現することは全く違うと思うんです。表現はどんな表現でもいいと思います。究極何をやって構わないと思ってるし、それは制限するべきではないと思います。でもそれを、無理矢理ボランティアだといって、行っているのかということ。しかし、また逆にボランティアのコーディネートする人間がそれを抑えちゃっていいの。10人いればみんな違う。アートってそういうものですよ。表現者の人、いかがですか?

寺崎 文科省の「復興教育支援事業」で昨年は5回に渡り、弦楽四重奏団と一緒に、釜石の白山小学校に通いまし

そういう中で、もしも無料がなくなったら「フランダースの犬」のネロ少年みたいな子の芸術の道が閉ざされちゃうってことがあるんじゃないかな...。だから支援している側は揺れるわけですよ。音楽でも絵でも映画でも、いい作品であればあるほど対価を払いたいと思うし、作家には次の作品を作ってもらいたいからお金払いたいと思うんですけど、かたやそういうことがある。

寺崎 宮古もまだまだ復興の先が見えない。伊勢さんがおっしゃったことも現実にはある。けれど反面払える人たちもいっぱいいるんです。以前高速道路の被災証明が問題になりましたが、やっぱりこの状況だから払ってコンサートを聞く人たちが、払えないけれど聞きたい。その人たちには提供するといふ二重のシステムが必要なんじゃないだろうかと思っます。

理想はやはりみんなが払ってそれで芸術を支える、それができたところで本当の意味の芸術が生活の中に根差したことになると思っます。

現実、どこでどういうふうな線を引きに行くか、変えていくかがこれからのポイントになっていくんじゃないかなと思っます。見極めをしながらね。

坂田 どこかでシフトは必要ですね。中村さんのところは入場料有料でやっていらっしやいますが、それについていろんな意見がありますか?

中村 あまり聞かなくていいですね。ただ今年度で言えばある一定以上の料金は冒険だと思っっています。

ホールだけが、表現の場か?

小川 大槌はホールはあるんですが現在役場として使われているので、施設としてはない。他の施設も予約待ちの状態です。

岡本 鑑賞の内容にもよると思っますが、地元でサークル活動や芸術活動している方たちは、練習場や発表の場にしたり、地域の公民館や体育館等を利用してはいるようです。ホールについては、使い勝手の良い、現状に似合った市民文化会館の再現をお願いしたいです。

川畑 去年の芸術文化協会の発表は、各団体共「すごくよかったです」という。行政も私たちも一致して、これからもこのままでもいいんじゃないかと話しています。けれど市民文化会館再建の目途がつかない。だから芸術協会の仲

間たちは、みんなで独立して運動を広めようということ意見が一致しています。

これまでの仕組みとは違う主催形式やコラボについて

中村 ボランティアだから会場費の減免、宿泊の手配、集客のノルマを課する主催者さんには困りました。子どもたちの心や将来に残るモノを遺して行つて下さる団体には感謝しています。

水野 私はない時代を知っていますので、ホールがあればいいかというところ「どっちでも」と思っます。

芸術鑑賞はどこでもできますが、ホールがある今、そこを拠り所にして芸術活動をしている人たちがすごく増えてはいるんだと思っます。その人たちはシンドリックに「欲しい」と思ってるんじゃないでしょうか。

坂田 ホールがなくなつた今が、一つのチャンスかなと思っます。でもみんな



伊勢 志穂さん(盛岡市) 一般社団法人SAVE IWATEで被災地支援活動に携わった中村、文化支援にも熱心。大学では美術科専攻



寺崎 巖さん(盛岡市) 震災後、岩手県で初めてのプロオーケストラ「いわてフィル」を創設。宮古市出身。3.11は実家で被災



水野 美砂さん(盛岡市) 舞台製作・設備会社(株)アクト・ディヴァイス取締役。より現場で、被災後の鑑賞事業をリアルにみえてきた



(司会) 坂田 裕一さん(盛岡市) いわてアートサポートセンター副理事長。岩手県演劇協会会長

た。いろんな支援に対して、卒業式に感謝の意を表したいという子どもたちの願いを音楽で表現するための授業をしました。これが、これまで単純にやってたアウトリーチを、更に突っ込んだ新たなものとしてやれたと思っております。

逆に我々音楽家も、コミュニケーションをとったり、子どもたちを成長させる原点を学ぶ、非常に大きなインパクトを貰った事業だったと思います。

悲惨な状態ではあるけれど、この震災を機に今までなかった国際的・あるいは中央の演奏家とコラボレートすることにより、新たな形が生まれたなと思います、そういう意味ではこの財産を活かしていかなければもったいないと思います。

水野 今後長い年数かかって復興していくんだろうと、みなさん思っていると思いますが、多分息切れしちゃうじゃないかなという気がして、不安もあります。

「どんな鑑賞事業」といえば、今二丁が多角化しているので、何でもいような気がしています。でも、多角化しているところに、もともと地盤がないところでもあるので、集客のノルマは勘弁して欲しい。

小川 一番はアーティストの自己満足に終わらないことだと思います。私たちはお話しをいただいて、コーディネートだったりマッチングだったりす

るのですが、本当にボランティアをする気持ちで被災地に来て下さるのであれば、誰でもいいと私は思っています。何かお話があれば大槌もぜひ。

川畑 受け手の方でどのようなことを欲しているのか、ボランティアする方に事前に伝わっている。ボランティアは一方的にお仕着せするのじゃないんだということを感じたい。

中村 何か残るもの。それについてはどういふ芸術活動がいいのかは、正直問わないような気がします。参加に自発的になれるような枠組みとか、そういう作り方ができるのか、かと思えます。

去年、ライブペインティングの方と大きなパネルにみんなで絵を描いて、それを後の世代に残そうという取り組みがありました。絵を自由に描くという表現の場が意外にない。子どもたちは表面的に笑っていますが、遊ぶ場所もなく閉塞感があると思います。そういったことを考えると、子どもたちが能動的にやれるような表現活動ができる場があればいいのかなと思います。

岡本 被災地・沿岸地域で今何を必要としていますかと問われましても、私自身よくわかりません。大勢の方が古を訪れて下さるだけで有り難かったです。地元の人たちは、自分で観たいものを選んでいてと思いますので制限する必要はないのではないかと思います。

「復興教育支援事業報告」 楽しかったね

文部科学省の受託事業「復興教育支援事業(アーティスト派遣事業)」美術ワークショップに参加しました。

この事業は、音楽・美術・演劇等の表現活動を用いる教育プログラムを作ろう!というもので単発的な芸術文化の体験ではな

く、地域の復興への動きを見つめ、震災による体験・記憶を次代につなげ、子どもたちの成長を育むことを目指すことを目標にしています。大槌町立大槌北小学校(大槌4校合同)の3、4年生と1、2年生の二つのプログラムをご紹介します。



▲段ボールを組み立てて椅子作り
中に入れる骨の部分が難しいね

H24.6.6、7
「ドラゴンチェアの旅
ワークショップ」
3、4年生

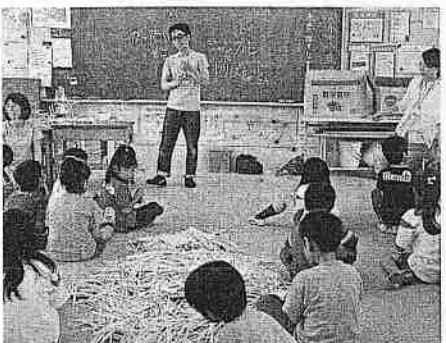


▲最後にドラゴンの頭をつなげて
並べてみました!全長94.5m

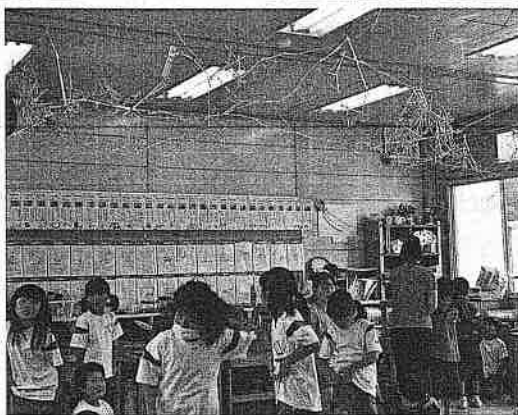


▲同じ色のゴムの所は
お友達と合体できます

H24.6.18、19
「ジャングルわりほしジム
ワークショップ」
1、2年生



▲講師の「なすび」先生と
アシスタントの「みっこ」さん



▲天井に飾りました
地面で見ると
全然違うね

どちらのワークショップも子どもたちがとても楽しそうでした。中には思い通り出来ず固まってしまう子もいましたが、自然と周りの子が助けていたのが印象的でした。講師やアシスタントも手伝より見守り伸ばす姿勢を基本に行っているようでした。この二つの作品のように、少しずつでも寄り添いながら繋がり続けていきたいと感じました。

(文責 いわて文化支援ネットワーク 永井志穂)

今後、継続できる仕組みとは 何だと思えますか?

坂田 阪神淡路大震災を経験した神戸市は、震災後10年経ったときに、このまちはどんなまちであるべきかを議論したそうです。

復興復旧の10年を過ぎ、その次の10年で私たちは何を目標にしてまちを作っていくか、文化指針を作って「神戸はデザイン都市」という宣言をしていく。国際都市神戸を文化という視点でいくという方向に決めてやっていったというのを聞きしました。

私たちもまた、この震災が一つのきっかけになって新しい関係が生まれつつあると思います。その中で次にどんな県土を作っていくかが問われているんじゃないか。

伊勢 ボランティアで来ている人たちがご迷惑になっているわけですね。そのご迷惑になっている人たちに、ボランティアされる側が「迷惑だ」と言えない。気を使って「日本だと思っただけです。もう少しフランクにコミュニケーションができればいい。」私はコーディネートする側の立場の人間なので、そういう見方をするんですが、そこが実は鍵なんじゃないかと。そこが解ければ、支援してくれるアーティストと地元の人が関係性を持って長く付き合っていけるんじゃないかな

と思います。

寺崎 コーディネートを誰がどこでするか。大槌みたいに団体が立ち上がった窓口を作ったということは、非常に喜ばしいというか、希望が持てるというか。そういう団体とつながりを持ちながらネットワークが広がって行けば、ミスマッチは防げると思っています。

地元の人たちが足を踏みしめ、いろんなことをきちんと考えて自発的にやっていくことを一つの大きな柱にして、さらにそこに来る人との共存というか、うまくいってコーディネートを考えていければ、我々はコラボレートしてこれまでもなかった芸術のスタイルを作っていける。

これからまだまだ解決していかねればならないことがありますが、地元と外がうまくリンクしていくようなつながりができればと思っています。

坂田 「新しい公共」という位置づけを持った私たちの文化支援ネットワークは、行政がやれない範囲の中でやる「個」へも対応していける活動ということでも始めました。

次回もまた、新たなテーマで熟議を重ねていきたいと思います。

今日は長時間に渡りありがとうございました。

私が思う芸術文化の復興

アクト・デバヴァイス 水野美砂

2011年3月11日の午後、突然携帯電話が鳴り、一瞬、何の音かわからなく、きょとんとしていた私に、部下が、「地震がきます」と、教えてくれました。それから起きた事、報道されていた事は、想像したことがないという文字で表すことすらできない、自分の意識を素通りしていくような感じでした。

私の勤め先の仕事は、イベント、舞台や放送等の照明・音響・美術と文化会館の舞台・事業スタッフをしており、震災直後から業務内容が変わりました。イベント等に関わっていた者は、催し物が延期や中止となり自宅待機、文化会館に関わっていた者は、避難所となった会館の支援業務になりました。各地の文化会館の被災もひどく、内陸のホールですら1ヶ月以上休館しなければならぬ状況でしたので、私の業務は、安否確認、被災状況確認と受注していた仕事のキャンセルの受付がほとんどでした。

その後徐々に催事が復活し、というより、慰問活動や復興イベントなどが増え私どもの仕事も増えてきました。先日、7月7日宮古市において「浄土ヶ浜 鎮魂の祈り」という催し物に関わらせていただきました。地元の20代30代の若者が実行委員会を結成し成功に終わりました。今後は支える若者が、一丸となつてがんばっている様は、未来を照らしているように感じました。

しかし私は、以前からお世話になっている、芸術文化の活動をしている方々が、震災前のように活動し、舞台等で発表できる日が来たとき、本来の復興となるのだと思っております。今後は、生きていくことに感謝しながら、皆様の復興に関わっていき

たいと考えております。